



平成 30 年度
入賞者作品集

目白大学 新宿図書館

平成 30 年度
読書推進プログラム
入賞者作品集

目白大学新宿図書館

もくじ

受賞者一覧	1
館長講評	2
受賞作品	
〔一等・特別賞〕	
人と歴史を見る視点 木下 晴香（中国語学科3年）	5
〔二等〕	
邁進する人、支える人 村上 真紀帆（日本語・日本語教育3年）	9
コンラート・ローレンツの「動物本質」論 熊本 颯雲（心理カウンセリング3年）	12
〔佳作〕	
共感のなかのアルジャーノン 石倉 綾海（心理カウンセリング3年）	16
友人に劣等感を抱いてしまったときは、どうしたらいい？ 青木 七夕（日本語・日本語教育3年）	21
見えているものがすべてではない 古澤 美夢（日本語・日本語教育3年）	25

受賞者一覧

【一等・特別賞】

木下 晴香（中国語学科 3年）

【二等】

村上 真紀帆（日本語・日本語教育学科 3年）

熊本 颯雲（心理カウンセリング学科 3年）

【佳作】

石倉 綾海（心理カウンセリング学科 3年）

青木 七夕（日本語・日本語教育学科 3年）

古澤 美夢（日本語・日本語教育学科 3年）

【参加賞（応募受付順）】

笹川 めぐみ（心理カウンセリング 3年）

小林 雅弥（心理カウンセリング 3年）

倉持 美岐（心理カウンセリング 3年）

崔 ユナ（日本語・日本語教育 3年）

杉浦 宥羽（地域社会 1年）

館長講評

新宿図書館長の今野です。まずは、受賞者の皆様にお祝いとお礼の言葉を申し上げたいと思います。おめでとうございます。

今回の読書推進プログラムでは、自分の専門性を生かしながら自分の個性も生かした作品が多く見られたように思われます。

その代表は、1等であり特別賞も受賞した中国語学科の木下さんの作品「人と歴史を見る視点」（選択図書「増補版 図説台湾の歴史」）です。台湾でベストセラーになった台湾史の概説書を題材にしている点は、中国語学科であるという専門性と密接な関係があるのだと思います。同時に、小学校の時に出会った台湾からの転校生のことや、高校時代の沖縄での体験によって歴史に関心を持ったこと、台湾に留学した際に学んだことなど、等々を上手に取り入れて全体を構成しています。題材となった本の優れた点を紹介するだけでなく、木下さんがこの本をとりあげた必然性についてもわかるように書かれています。今回、木下さんの作品は1等、そして特別賞の受賞となりましたが、曖昧さがなく言いたいことが明確に伝わる文体で書かれている点、強い言葉を使っていないにもかかわらず、木下さんの台湾に対する強い思いが伝わるように文章が構成されている点が高く評価されたものです。

2等の2名のうち、日本語・日本語教育学科の村上さんは、辞書編纂にかかわる人々を描いた「舟を編む」をとりあげ、「邁進する人、支える人」という作品で2等を受賞しました。国語の辞書を編纂する物語を取り上げるというのは、日本語・日本語教育学科らしい選書であり、村上さんの日本語への関心を反映しているのだろうと感じました。辞書作りに没入する辞書編纂者と、それをサポートする編集者の関係を「邁進する人、支える人」というタイトルで表す言葉のセンスも光っています。

もう1名の2等は、心理カウンセリング学科の熊本さんの「コンラート・ローレンツの『動物本質』論」です。心理学専攻の学生らしい選書で、ノーベル生理学・医学賞受賞者のコンラート・ローレンツの「ソロモンの指輪」を取り上げています。こういう古典的名著というのは皆が散々論評しつくしているのに、新しい視点で評価するのは難しいのかなと思っていました。しかし、熊本さんはローレンツの強い感情、とりわけ動物への愛情や、表面的にしか動物を理解しない既存の科学者たちへの怒りなどに焦点を当てながら、ローレンツの熱さや激しさについて論じています。なるほどこういう読み方もあったかと、感心しました。

佳作の心理カウンセリング学科石倉さんは、「共感のなかのアルジャーノン」(選択図書「アルジャーノンに花束を」)という作品です。終りの方で石倉さんは、文章で表現された文学作品ならではの良さについて、映像作品と対比して論じています。「映像作品においては登場人物の総数が分母におかれ、主人公はその分だけ割られていく」、つまり、映像作品では一人の人の内面に没入することが難しいということ、石倉さんらしいきりっとした表現で述べていて、そこに深く納得しました。

同じく佳作の日本語・日本語教育学科青木さんは「友人に劣等感を抱いてしまったときは、どうしたらいい？」(選択図書「置かれた場所で、咲きなさい」)という作品です。どうすれば良いのかわかっているけど踏み出せないことや、そう考えれば良いとわかっているのにそのように考えられないということは多くの人が経験することです。そういう時に自分の背中を押してくれる言葉によって一歩踏み出せることがあります。そして、本を読んで一歩踏み出せるようになることも、確かにあります。そういう実感がこもった作品でした。

日本語・日本語教育学科の古澤さんは「見えているものがすべ

てではない」(選択図書「レインツリーの国」)という作品で、ネット上の交流について自分の体験も踏まえながら論じています。タイトルの「見えているもの」というのは、「対面すればわかるけど、ちょっと表面的なもの」ということなのだと思いますが、対面しなくてもわかること、そして対面してもよく相手のことを観察しないとわからないことを大事にすべきだという古澤さんの主張にうなずきながら読ませていただきました。

様々なメディアが登場し、情報を得たり、物語を楽しんだりする方法は多様化しています。本ではなく動画を楽しむ人、新聞ではなく動画で情報を収集する人も増えています。ただ、思考過程だとか感情の動きだとか、人間の内面を直接描写するという点でいえば、文字／文章メディアの優位性はいまだに揺るぎません。思考力を磨いたり、人の内面を理解しようとしたりするなら、今でも本を読むということが中心になります。読書推進プログラムによって、皆さんの内面を磨くチャンスが少しでも広がればと願っています。

最後に、審査に当たった先生方、プログラムの告知から本日の表彰式まで運営をしてくださった図書館スタッフの方々、そしてなによりもよい作品を応募してくださった皆さんにお礼を申し上げます。

平成 31 年 1 月

目白大学新宿図書館長 今野 裕之

一等・特別賞

人と歴史を見る視点

中国語学科 3年

木下 晴香

何事もきっかけは偶然や些細なことからであり、突然訪れるものではないだろうか。

私が台湾に興味を持ったのは、小学生の頃である、台湾から1人の女の子が転校してきた。当時は周囲に外国語を話せる友人がいなかったので、興味津々の私は彼女に「名前を発音してみて」とお願いし、そのとき中国語を初めて直接耳にしたのだった。

彼女との友情は今も続いてはいるが、当時はまさか将来私が中国語を専攻し、台湾へ長期留学に行くことなど想像もつかなかった。ましてや苦手意識を持っていた「歴史」という分野に関心を抱いている今の自分にも驚いている。なぜなら私は、長いこと世界史や日本史に対し、戦争などのやるせない悲惨なイメージを持っていて、目をそらし向き合おうとしてこなかったからだ。

ところが、高校時代に祖母のある一言を聞いてから心境が変化した。修学旅行で沖縄へ行くと告げた時、祖母に「平和の礎にひいおじいさんの名前があるから見てきてほしい」と言われたのだ。思わず耳を疑った。「平和の礎」とは沖縄戦での戦没者の名前が記されている慰霊碑であり、つまり私の曾祖父も沖縄戦で戦い亡くなった1人ということになる。私は、歴史が他人事とは思えなくなると同時に、自分の曾祖父という身近な存在についてさえ知らなかったことを恥ずかしく思った。それからは歴史という分野にあらためて興味を持ち始め、日本との歴史的関係が深い台湾で

の留学中も、台湾史に触れる機会を積極的に探すようになった。

本書は、先史時代から現代までの台湾史を順に辿っていく歴史書である。まず序文では、歴史研究者である著者が「台湾の歴史を研究するためには、台湾を離れなければならない」時代があったと書いている。1949年から38年間という長い間、中国大陸から来た国民党政府によって戒厳令が敷かれ、自由に物事を語ることさえできない状況が続いたからだ。民主化が進む1980年代まで、台湾人は自分たちの歴史を知ることが難しかった。そう考えると、台湾人研究者によって書かれた本書が1997年に台湾で出版されたことも、大きな意味をもつものなのだとわかる。また、私のような日本人からみれば、台湾人の視線で日台の歴史を捉える本書は、私と異なる視点から物事をみているため、新しい発見が多かった。

たとえば、台湾は「親日」だとよく耳にすることがあるが、1895年から50年間日本の植民地だったため、様々な辛い歴史も存在する。本書には「われわれは、確かにあの時日本人だった」という一文がある。日本統治時代の人々は学校で日本語学習を強要されていたため、今でも流暢に話す人が多い。実際、私も現地で年配の方々が日本語で話しているところによく遭遇した。彼らは電話に出るとき、「もしもし」から始まるほど、日本語が生活に染み付いている。そんな彼らの中には、日本統治時代に台湾という地で生まれたがために、自分を台湾人というべきか日本人というべきか迷うという心境を抱えている人がいる。私の台湾人の友人の祖父もその1人だ。

一方、同じ時代に台湾で生まれ育ち、戦後は本土に引き揚げた日本人を「湾生」という。彼らもまた、自分にとって故郷とは、台湾なのか日本なのか、それとも両方なのかという複雑な心情を抱えている。幼い頃に過ごした思い出の地を訪れる湾生も少なく

ない。

こうしたアイデンティティの揺らぎのなかで、彼らはどんなふうに日本や台湾を見ているのだろうか。答えは一人一人違うかもしれないが、それを考えると私は胸がつかえるような思いだった。

また、私たちは目に見えるものを信じがちだが、蓋を開けてみないと中身は分からないものである。台湾は「多民族社会」であり、漢民族のほかにも先住民や移民たちが大勢いる。今日世界では、民族同士の争いや差別が絶えない。本書にあるように、台湾先住民も19世紀から現代まで長い差別の歴史が続いていた。

しかし、実際に台湾を訪れてみると、今は争いや差別などなく、むしろ先住民を尊重しているように感じた。1980年代以降の急速な民主化により、先住民の権利が復活しつつあり、各民族の文化を保護するための運動も盛んだ。現在、台湾政府は先住民の経済力や学力格差を考慮して、大学受験の際に加点したり、就職の際に先住民枠を設けたりする措置もとっている。

こうした制度は評価される反面、先住民以外の台湾人のなかには、それらの優遇策に不公平感をもち、よく思わない人々も存在する。私はこれまで、台湾社会は異なる民族同士が互いを尊重し合いバランスが取れていると思い込んでいたが、現地で友人たちに話を聞き、まだまだ問題や課題があることを知った。「親日」や「湾生」、「民族差別」や「多民族社会」など、何事においてもその言葉の表面的な意味だけでなく、どのような背景があるのかを知ることが一番大切だと思った。

湾生や先住民という言葉も私たち日本人にとってあまり馴染みのない言葉かもしれないが、「白色テロ」もその1つであろう。白色テロとは、戦後の戒厳令下でおこなわれた国民党政府による反体制派への政治的弾圧である。当時の独裁政権は、共産主義者だけでなく、政府に異論を唱えるものは一斉に取り締まった。本

書にも、一度捕まると「必ず自白に追い込み、拷問に耐えられなくなった時、自己の精神を裏切り、友人や見ず知らずの人を売ったりしてしまおう」という残酷な状況があったと書かれている。無実かどうかなど最初から関係ないのである。この連鎖はとても恐ろしいものだと思った。

こうした強権政治の背景には、1947年に起こった二二八事件がある。国民党の独裁政治に民衆が刃向かったため、政府が武力でこれを弾圧、多くの犠牲者が出た。二二八事件によって、政府と民衆のあいだに大きな不信感が生まれてしまったのだ。このような重大事件も戒厳令により口にすることは許されず、当時は公に知られることはなかった。私は台北の二二八事件の記念碑の前で、恐らく当時を経験したであろうご高齢の方が記念碑に向かって手を合わせている姿を見たことがある。それがとても印象的で、今でも心に残っている。戒厳令が解除されてすでに30年。公にすることのできなかつた歴史も少しずつ明らかになってきているのではないかと感じた。

私にとって台湾とは、留学で1年間過ごした大切な場所であり身近な存在だ。でも、どこか「知った気になっている」だけなのかもしれない。どんなに寄り添えたとしても、日本人である私には全てを理解することは不可能なのである。それでも自分なりに台湾の立場に立つ気持ちを忘れずにいたい。そして、もっと知っていきたい。歴史に限らず言えるだろうが、目に見えるもの聞こえるものだけに囚われず、その本質や背景を知ることがとても大切だ。それが思い込みや偏見をなくし、ものごとを相対化した柔軟な考え方ができるきっかけになるからだ。

周婉窈『増補版 図説台湾の歴史』平凡社

二等

邁進する人、支える人

日本語・日本語教育学科 3年

村上 真紀帆

自分が読みたいと思う本を探している時に目を引いたのが、『舟を編む』だった。過去に本屋大賞第一位を受賞し一時期話題になったため、そのタイトルに見覚えがあったという単純な理由であった。この時点では、ただ自分の知っている本に反応しただけだったのだが、推薦者のコメントに「書物を読まなくなった、辞書を引かなくなった学生に一読を勧める。」とあり、まさに自分がそれに当てはまったためこの本を選んだ。

『舟を編む』は、玄武書房の辞書編集部が『大渡海』という新たな辞書を作成する過程の中で、辞書の作成方法を所々で説明しつつ、主人公を中心とする様々な登場人物の辞書に注ぐ情熱や、悩み、成長などを描いている。

そもそも辞書は、学校の授業で使用することがあったため用意したものであり、自分から率先して頻繁に辞書を引くわけでもなく、必要な時使えるように教室の自分専用のロッカーの中に常時置いてあるという私にとってあまり馴染みのないものだった。しかも高校生にもなると、重くて場所をとるからと電子辞書を使うようになり、ますます遠い存在となった。さらに最近では分からないことがあるとすぐスマートフォンで調べるようになっていたため辞書には久しく触っていなかった。しかし、物語を読み進めるにつれて、辞書が自分が予想していたよりもはるかに長い時間をかけて作られ、作品に携わった多くの人間の知恵や工夫、情

熱が込められた大作であることを知った私は無性に辞書で言葉を引いてみたくなった。作品を読んでいる中で分からなかった言葉がいくつもあったため、自宅にあった辞書を引っ張り出しさっそく調べてみた。ページを開いてみると、それまではただの文字の羅列に見えていたものが、文字の大きさや太さ、図版の位置、使用する記号の種類など作成者が辞書の使用者が快適に言葉を調べることが出来るよう工夫を凝らした努力の結晶に見えた。今まで見ようとも思わなかった奥付を見てみると、その辞書の初版が発行されてから、改訂版が発行されるまでに十四年もの間があった。辞書を完成させてすぐに改訂作業を始めてもこれだけの年月がかかることに驚き、また「辞書の作成」という一つのことには自分の時間を費やし、邁進できる彼らに私は尊敬の念を抱くと共に羨ましく思った。

この作品に出てくる辞書の作成に全力で取り掛かる主人公を含む辞書編集部を見て、自分にはここまで夢中になれるものは無いと改めて認識した。好きなものやことはたくさんあっても、今までそれらに夢中になれたかというところでもないと思う。自分が好きで続けていたことが将来の仕事に繋がったり、それがきっかけで結果的に大きなことを成し遂げた人をテレビでたびたび見てきた。自分が熱中していることについて生き生きと語る彼らを見て、それが出来ない私は羨ましく思った。また、将来の夢がしっかりと定まっていて、自分のやりたいことや好きなことに突き進んでいく友人を見て、自分が何をしたいのかいまいち定まっていない私は不安に思うことも多かった。そんな私は、作中に出てくる西岡という人物に似たものを感じた。彼は、辞書編集部の一員でありながら辞書に情熱を注ぐ辞書編集部の面々を理解することが出来ず、何かののめりこむことを格好悪いことだと避けていたが、一方で自分にもそんなものがあつたならばとも思っ

いた。そんな彼は、物語の中盤で理想の辞書を作るために全力である作成者達をサポートすることに全力で尽くすことを見出した。その後彼は、宣伝広告部へと異動してしまい、辞書編集部ではなくなってしまうのだが、それでも『大渡海』完成のための辞書編集部へのサポートを続ける。今まで、熱中出来るものが無いことにコンプレックスにも似た感情を持っていた。それを見つけることが出来たら良いけれど、そうでなくても周囲の人々のように自分が夢中になってのめりこむ何かが無くても、その人達の目指す目標や夢を達成させるために尽力することも素晴らしいことなのだと分かった。

『舟を編む』を読んで、小学生の頃に、調べた言葉に付箋を貼り続けパンパンに膨らんだ辞書を持っていたクラスメイトがいたことを思い出した。当時は、「あんなに調べていてすごいな。」ぐらいにしか思っていなかった。しかし、この作品を読んだ後だと、ページがよれよれになるまで使い込んで、付箋でいっぱいになるまでたくさんの言葉を調べてもらうことは、辞書の作成者達にとって、この辞書を作って良かったとやりがいを感じる事が出来るのだろうなと思った。

最近、辞書を引いていなかったからという理由で読んだ作品だったが、辞書作成の工程や作成者の仕事について知ることが出来たのはもちろん、全力で何かに取り組むことの素晴らしさを再認識したり、今までの自分の考え方が変わったりと、この作品を読んだことで得たものがたくさんあった。今後の自分のためにも、これからは積極的に本を読んでいきたい。

三浦しをん『舟を編む』光文社

二等

コンラート・ローレンツの「動物本質」論

心理カウンセリング学科 3年

熊本 颯雲

「コンラート・ローレンツ」の名前を心理学を専攻している私は、大学の講義で知った。彼の名前が登場するのは私が読んでいる概論書内では、行動の仕組みに関する記載がある箇所、「刷り込み」の概念と共に登場する。というのも当然である。なぜなら、彼は刷り込みの研究者で、動物行動学(エソロジー)という分野を開拓した行動学者だからである。1903年にオーストリアのウィーンで生まれてから、1989年に同じくオーストリアのウィーンで亡くなるまでに、彼は近代の動物行動学の基礎を作り上げ、1973年にはノーベル生理学・医学賞を受賞した正真正銘の偉人である。

今回、私が読んだ本はそんな彼が1949年に刊行した『ソロモンの指環』である。この本を紐解く以前は、偉大な業績を数多く残した彼の本だけに恐らくとても、難解、そして堅苦しい、と思っていた。ところが、彼のまえがきでの論調は実に軽快でコミカルなものであった。

まえがきの一番初めにペーター・ローゼッガーの詩、『わが怒りもてなせるものは華やかに生い育ちたれど一夜すぎ...雨に消えたり わが愛より播けるものはつねに芽ぐむその実りおそけれど...祝福はその上にあり!』というものが載せられている。彼のまえがきは、これを受けての内容である。彼はこの本を怒りに任せて書いていると述べている。怒りの矛先は動物を知らずに動物を

語る多くの著者とそれによって生み出された書籍である。それらに対して彼は本文中で、「三度の禍あれ」と憤慨している。彼は自然科学者であり、自身が芸術家ではないことを理解しているので動物のすばらしさを伝えるには自然の事実を省略して「様式化」した作品を作る必要はないと主張している。むしろ、事実をそのままに忠実に伝えることが自然科学者の務めであり、あるべき立場であると主張している。本質こそが、真なる価値を演出する、と。

彼は、動物を愛している。私はそう感じた。そしてそれは、人が恋人や子ども向けのよう柔らかな慈愛と確かな敬意である。なぜなら、彼の怒りの根源は動物に対する浅はかな理解による結論づけだからである。曖昧なままの理解で他者に自分の宝物を侮辱されたまま外面的にも内面的にも何一つ反応を示さない、などということはあるだろうか。私には考えられない。ゆえに、彼は動物に対する理解が浅く、正確に書き記すことができないから様式化して芸術と科学の曖昧な両立を図ろうとする自称自然科学者に罰が当たれば良いのにと憤慨しているのであろう。そう考えると、彼はやはり愛ゆえに怒りをもっているのではないだろうか。彼も本文中で、私の愛は怒りによるものであるという旨の発言をしている。読者としての私はそれを一方的に受け止め、私の考え方を彼の自称自然科学者に対する数々の怒りから賛同する立場に立ちたいと考えた。

古代イスラエル王として旧約聖書の『列王記』に登場するソロモン王は神に与えられた指環によって、動物たちを使役して動物たちと語り合うことができたと言われている。しかし、コンラート・ローレンツは、指環などなくとも動物と会話することができると豪語している。彼は指環などという魔法を用いるのは魔法使いたる詩人であり、「ある動物の『語彙』」を理解することはけっ

してむずかしいことではない」と述べている。なんと夢のある話だろうか。夢のあるエピソードの一つとして彼の友人アルフレート・ザイツがカモに向かって「マガモ語」のアクセントのまま「ハイロガン語」で怒鳴ったというのが本文に登場している。正直なところ、「ハイロガン語」などという言語は聞いたことがないが、そこが彼のユーモアであろう。彼らは真剣にカモに「話しかけていた」のだ。とはいえ、ローレンツ自身も動物が真の意味での言葉を使えないことを知っている。しかしながら、それは動物たちが意思疎通を行えないということではないことも記されている。むしろ、人間の生理的な気分感受する機能は言語の獲得に反比例して失われていったという。一方で、動物たちが高品質な言語を獲得していない反面、目で見て相手の生理的な気分感受する機能を有し発達させてきたために人間よりもはるかに優れているという。本文に登場する例だが、人間はさらに進むか、それとも家へ帰るのかを発信することはできないが、動物にとっては朝駆けの駄賃である。そして、それを感受する機能も先述の通り発達しているのである。

コンラート・ローレンツにとって動物の言語や機能というのは決して人間を下回る粗悪品ではないと考えられるものなのだろう。むしろ、動物がもつ能力を人間の段階に「落とし込む」作業によって評価は不当なものとなり、本質を霞ませる。ローレンツにとって動物は敬うべき対象で、偶発的な場面であっても、常に自然な状況を動物たちに与えることを目指した。動物と共に暮らすのは危険だからという理由で「娘」を檻に入れるほどに。

ところで、私に彼の本質が掴めただろうか。いや、間違いなく無理だっただろう。一介の学部生が偉大なる研究者を値踏みすることがどれほどにおこがましいことか。だが、今、傲慢にも「である」などと言いつついくつかの文にここまで来て違和感を感じ

ながらも、どこか達成感を感じている。講義で名前を聞くだけだったコンラート・ローレンツという男をさらに知った、その一点において。

動物に対する慈愛と敬意が存分に語られた本書は、ローレンツ曰く怒りを持って執筆されたという。しかしながら、それはローレンツがもつ動物への愛ゆえの怒りなのである。闇雲に文句を言っているのではない。動物の真なる魅力を語りたいのだ。それゆえきっと、本書が雨で消えることはないだろう。

コンラート・ローレンツ『ソロモンの指環』（日高敏隆訳）

早川書房

佳作

共感のなかのアルジャーノン

心理カウンセリング学科 3年

石倉 綾海

「アルジャーノンに花束を」のストーリーを説明することはとてもたやすい。知的な障がいを持っていた青年が手術を受けて天才となるものの、時を同じくして手術を受けた白ねずみ・アルジャーノンにやがて訪れた知能の衰えと死という末路を目の当たりにし、自身もそれに抗えずに同じ道をたどる。おそらくこの短い一文で物語の主要な分岐点を軽く押さえることすら可能だ。しかしこの物語に出会ったことの本当の意味は、単純なストーリーの筋を追い、その起伏を楽しむことではない。私は物語の主人公、チャーリー・ゴードンを想うたび、胸にたゆたう小さな痛みと優しさとともにそう思う。物語はチャーリーの一人称視点で進む。私たちの見る物語の世界は、実のところ「チャーリーの世界」である。そしてそれは「チャーリーの人生の追体験」でもある。そしてそれがゆえに読者はいつも試される。この物語を「どう」見るのかということ。本作の筋は一つであるが、チャーリーの繊細な心の中では、様々な出来事に際して悲喜こもごもがあふれ返る。そしてそのたびに私の心でも同じように感情が揺れる。物語の筋に沿って、知的な発達と衰える過程の記録として本作を見ることもできれば、アリス・キニアンとの恋物語として見ることもできる。知能と心の温かさの関連を考えることもできれば、障がいと家族というテーマについて考えることもできる。物語に限ったことではないが、人と自分の見ているものは驚くほど違う。

その人の見る世界は結局のところその人自身であると思う。だから私は私として、この物語はチャーリーとアルジャーノンの親愛という一点に収束するのだと言いたい。アルジャーノンがいたからこそ彼は彼として生きることができ、それがゆえに私の心を痛いほどに打ったのだと。

チャーリーが初めてアルジャーノンに出会ったのは、競争者としてだった。手術を受けた後、チャーリーは研究者たちから迷路課題を課され、その競争相手となったのがアルジャーノンであった。初めはアルジャーノンに負かされていたチャーリーはやがてアルジャーノンを、そして周囲の人間すら優に超えていき、勝負相手としてのアルジャーノンに別れを告げる。そのシーンはチャーリーが変化してしまったことを感じさせ、どこかひんやりとしていて切ない。チャーリーが再びアルジャーノンに対して特別な関係を見出すのは、勝負相手としての見切りをつけたかなり後のことである。著しく知能の発達したチャーリーは瞬く間に天才となり、今まで見えなかったものに触れ知識と知恵を確立し、同時に心の温かさを失っていく。そんな折、自身に手術を施した研究者の発表会に同行するが、そこで自分の行く先を初めて知ることとなる。その上研究者たちが知的な障がいを貶めるような発言をし、それを笑うのに耐えきれず、チャーリーはアルジャーノンが入っていた檻の扉をそっと開ける。チャーリーがアルジャーノンを、「作られた天才」という境遇と悲しみを共有する相手として認めた瞬間である。檻から逃げたアルジャーノンを追って会場中がパニックになる中、チャーリーはアルジャーノンの行方をすぐさま突き止め、一緒に逃げようと手のひらを差し出す。その手にアルジャーノンがためらいもなく乗ったことから、その信頼関係が相互的なものであることがわかる。チャーリーが胸の中で自分をこき下ろす研究者を毒づき、アルジャーノンの手を取る

瞬間、悲しくもなぜか、胸がすく思いがした。知恵と知識で自分を武装したチャーリーが、その武器を下ろした一瞬だと感じたからだ。その後二人は逃避行の末にたどり着いた地で同居生活を始めるが、そこでチャーリーは自分の道標としてのアルジャーノンに出会う。自身よりも先に手術を受けていたアルジャーノンの経過を見ることで、チャーリーは自分に残されている時間が少ないことを悟る。そして先を行くアルジャーノンを道標としながら、チャーリーは自分がやるべき残されたことをこなしていく。これが道標としてのアルジャーノンが果たした役割である。そして最後にチャーリーがたどり着いたのは、かけがえのない友人としてのアルジャーノンの姿であった。チャーリーが自分のなすべきことを終わらせていく中で、アルジャーノンはついに死を迎える。そのときチャーリーは、天才・チャーリーとして初めて涙を流す。彼が裏庭に墓を作り、花を手向けるシーンのもの哀しさを何に例えよう。胸がつかえるほどに切迫する思いを鮮明に思い出すことができるのに、私はその感情をうまく表す言葉をまだ知らない。知能と引き換えに他者への共感や温かさを犠牲にした天才の手に最後の最後に残ったものは、同じ境遇を生きた白ねずみの友人であった。そのことがたまらなく悲しい。なのに物語を最後まで紐解くと、なぜかその悲しみすら愛おしい。

ここで疑問に思うことは、ほかに彼を理解できた者はいなかったのかということである。物語の初めから最後にわたり登場したアリス・キニアンという女性について考えてみる。彼女はチャーリーのそばにいようとし続けた。愛に関する知見を彼に与えたのもアリスであり、彼を「理解」するのに一番近い立場にあったと考えられる。けれど彼女が本当にチャーリーの理解者であったのだろうか。少なくとも私はそう思わない。彼女がチャーリーに関わるたび、私は内心何かに急き立てられるような気持ちになった。

彼女はいつもチャーリーに「何か」を期待し続けたからだ。ほかの登場人物はもってのほかで、彼を理解しようとしなかった。本作の中で唯一の理解者は、やはりアルジャーノンという友人だったのだと思う。それはチャーリーにとって不幸なことだっただろうか。人の幸不幸を量るのは押し問答に近いと考えるが、私は彼が不幸であったとは考えない。チャーリーは作中、アルジャーノンのほかに誰にも理解されることはなかった。そして同時にチャーリーも、誰のことを理解しようとはしなかった。そんなチャーリーが最後に言い残したことは、アルジャーノンへの親愛にあふれている。彼が天才を通過して、元いた場所に戻るの意味は、そしてアルジャーノンに出会ったことの意味は、それで十分なのだと思う。

私はこれまでもそうであったように、これから先も、本作のタイトルが冠されたドラマや映画などを自分の意志では見ないだろうと思う。表現媒体にはそれぞれの特色がある。その良し悪しとは別にして、私がこの物語に見た極彩のような感情は、決して文学作品以外で味わうことはできない。映像作品においては登場人物の総数が分母におかれ、主人公はその分だけ割られていく。しかしそれでは意味がない。それは「チャーリーの生きた世界」でなくなってしまう。初めて本作を読んだのは数年前のことだが、今でも本を開くたびに得体のしれない激情が胸を超えて目からあふれそうになる。それは辛い感情でもある。けれどこれから先も、私はふとした機会に本作を紐解くのだと思う。なぜならその感情を味わうこと自体に意味があるからだ。物語の中でチャーリーが悲しみを見つけ、そしてそれをアルジャーノンとともに分かち合ったように、私はこの悲しみや愛しさをきつといつかまた誰かに話してみたいくなるのだ。

ダニエル・キイス『アルジャーノンに花束を』（小尾芙佐訳）

早川書房

佳作

「友人に劣等感を抱いてしまったら どうしたらいい？」

日本語・日本語教育学科 3年

青木 七夕

私は、自分を取り巻く環境に対していつも文句ばかり言っていた。「友人が羨ましい」「自分はその友人のように出来るはずが無い」などネガティブな発言ばかり言い、行動を起こしていない。とこの本を読み気が付いた。同時に自分の存在意義を誰かに認めてもらい、背中をポンッと押して欲しかったのかもしれないと思った。

現在私は大学3年生だ。今年編入学をした為、短期大学時代の友達は皆社会人として日々働いている。自分がもっと学びたいと思って大学に編入したが、本当にこの判断が正しかったのかいまだに悩む時がある。友人達は一足早く己の道を決め、社会人として社会に必要とされ、たまに会社の愚痴を言いながらも立派に働いている。それに比べ私は、まだどのような仕事に就きたいかも見つかっていないければ、自分が頑張りたい事もわからない。一年前まで一緒に授業を受けていた友人達は、社会人となり社会の荒波に揉まれながらも必死に頑張っている姿や話を聞くと私は何をしているのだろうか、こんなことでいいのか、と自問自答する日々だった。追い討ちをかけるように親戚からは「遊びたいから就職しなかったのでしょ」とか「何のために製菓学科に行ったの」と言われ精神的にも辛い日が続いた。考えても何が正解なのか分からず友人を羨ましがったり、現状に文句ばかり言っていた。他

人に相談しても同じような事を言われると恐れ自分の中で悶々と考える日々だった。

そんな時読んだのがこの「置かれた場所で咲きなさい」だった。正直、タイトルよりも表紙に咲くたんぽぽとわたげ、そしてその下の「どんな境遇でも輝ける」という言葉に引き寄せられ、手に取った。パラパラとめくると、ある一言に心を奪われた。

『現実が変わらないのなら悩みに対する心の持ちようを変えてみる』

この言葉を見たときは見方を変える、視点を変えてみるのか、くらいにしか感じなかった。しかし本文を読み進めると目から鱗のような大きな発見が待っていた。

『心の持ちようを変化させても悩みは変化しないかもしれない。でもきっと悩みは消えなくても生きる勇気が芽生えるはず』そう記されていた。

この発見は私の21年の人生でベスト3に入る大発見だ。ニュースだったら速報でお伝えしたいレベルの大ニュース。

私はてっきりこの本は題名通り「置かれた場所」で咲くためのノウハウ的な事が書かれた本だと思っていた。なので悩みは消えないが…ではなくこのように考えたら悩みはなくなりますよという本だと思っていた。

生きる勇気が芽生える。そうか私は今を生きる希望や勇気が欲しかったのだと自分でも気づいていなかった欲求に気が付いた。

大切な事に気付かされた私は初めからしっかり読もうと思い目次を開いた。すると話の構成が私の置かれている状況と酷似していた。

自信を失った人がまず自分自身に語りかける。辛い日々も笑える日に繋がっているよ。大丈夫、神は力に余る試練は与えない。

現実を受け入れよう。自分の心の中の良心の王様の言葉に耳をすましてみよう。

こうして励まされたら、次は明日に向かって生きていくために考え感じ、行動しよう。何も出来なくたっていい。ただ、笑顔を忘れずに。笑っていると不思議。何事も上手くいっている気がする。貴方は大切大事な人です。存在を認められると人はもっと強くなる。

そしてありのままを受け入れよう。相手に認められた受け入れてもらえた、と思えたなら自分も相手も信頼し尊敬してみよう。たとえ辛い夜でも必ず朝はやってくる。最後は毎日を私の一番若い日！として輝きを持って生きることを意識できたらもう完璧。迷いはないはず。

…と語りかけてみたもののすぐに「よし悩みは無くなった」とはならなかった。だが、読む前よりも明らかに心は軽くなっていた。今を生きていこう。友人と比較することを止めようと思うのではなく、色々な視点に立ち自分の考えることを整理しようという考えに変わった。不甲斐ない自分を否定し、周りを羨ましがめるのではなく自分と仲良く生きていこうと思った。今の私が「置かれている場所」がベストであると考え改めてこれから頑張ろうと思う事ができた。

この本の最後はこのように締めくくられている。「置かれた場所で咲きなさい。でも、咲けないときがあっても良い。そんな時は、次に大きな大きな花を咲かす為に根を深く深く張る時期である」読み終わった後も著者である渡辺和子さんの暖かい言葉がじんわり伝わりほっこりした。

私はまだまだ未熟だ。しかしそれを恥ずかしいと思ってネガティブな発言ばかりするのではなく、一足早く社会へ出た友人たちと話をし、社会人の先輩としてアドバイスを貰おうと思えるよ

うになった。どこかで劣等感を抱き、連絡出来なかった友人に連絡してみよう。この先、壁にぶつかる事が多いと思う。その度に周りを羨ましがるのは無く、自ら行動を起こし笑顔で一步ずつ乗り越えて行きたい。私の周りにはたくさんの人生の「先輩」がいる。

渡辺和子『置かれた場所で咲きなさい』幻冬舎

佳作

見えているものがすべてではない

日本語・日本語教育学科 3年

古澤 美夢

私がこの作品を選んだ理由は、以前から本のタイトルを知っていたからだ。内容は知らないが、数年前には映画にもなっていたので、気になって読んでみた。この作品は、本をきっかけにインターネットを通じて知り合った男女のラブストーリーということもあり、登場人物の伸行とひとみがメールでやり取りをする場面が多く、ひとみの考え方が私と似ている部分もあったため、本を読むことがあまり得意ではない私でも夢中になって読むことが出来た。

私がこの本を読んで学んだことは、大きく分けて二つあった。

一つ目は変わる勇気を持つことだ。最後にひとみが変わろうと努力をしたのは、伸行の影響があったからとも言えるが、ひとみ自身が勇気をもって前に進もうとしたからこそ実現したことだと思う。私自身、ひとみのようにダメな部分を分かってはいるものの、なかなか変えられずにいるため、このことは、大学生活においても、卒業後の人生においても私にとって一番必要な要素だと思った。これからは、自分自身変えたいと思っている部分を積極的に変えていこうと思う。

二つ目は見た目よりも本質を見ることだ。この部分について、私が特に注目した点が三つある。一つ目は、インターネット上で人と出会うという事についてだ。インターネットを通じて知り合った人と、こんなにも多くの事を共有して良いのか、変な人だ

と思われないか、などの葛藤が伸行の中にも見えた。インターネットの普及が増えている今でもこの問題は存在する。確かに、インターネット上で知らない人と会話をしたり、その人と直接会ったりする事は、リスクが高いと思う。少し前の私も、インターネット上で知り合った見知らぬ人と会話をすることに抵抗があり、危険な事だと考えていた。しかし、最近になって全員が危ない人だと決めつけることは間違っているのではないかと感じるようになった。何故なら、伸行やひとみのように純粋な気持ちで誰かと感情を共有したいと考えている人も必ず存在するからだ。私は外国人と交流する事が好きで、学校内のみに限定せず、インターネットを通じての交流も経験したことがある。その時に怖い人や、変な人が絶対いなかったとは言いきれない。しかし、本気で語学交流や文化交流をしたいという理由でそのサイトを利用している人もいた。実際にその人と会話をしたことがあるため、インターネットが必ずしも危ない場所だと決めつけてしまう事は良くない事だと思う。相手の顔が見えないことで、普段話しづらい話もすることが出来るなどのいい点もある。だからこそ、自分自身がきちんとした考えを持ち、行動をすれば、自分にとっても、相手にとっても良いコミュニティーの場所になるのではないかと考える。また、そんな多くの人と繋がれる場所で、お互い惹かれ合う人と出会えることは運命のようなことだと感じた。二つ目は、人はそれぞれ抱えているものがあり、それを比較することは良くないということだ。この本の登場人物は、それぞれ悩みを抱えていた。ひとみは自身の不自由な耳について、伸行は自身の父親について。二人の苦痛や悩みは違い、立場や環境も異なる。そのため、どちらの方がもっと辛いのかは比較することが出来ないと思う。なぜなら、その出来事をその人がどのように受け止めたのかによって異なるからだ。私は普段、活発な性格であるため、

周りからは悩み事がなさそうだと誤解されやすい。しかし、心の中では見えている姿とは違い、悩み事や心配を抱え、活発的に行動することが辛い時もある。それを表に出すことが出来ない私は、そんな時でも頑張って大丈夫なふりをしてしまうことがある。そのため、「俺にも君みたいに傷ついた昔があったかもしれんとか思ったことあるか？」(150頁)という部分に共感し、自分自身と重なって見えた。三つ目は人が理解をしてくれているかではなく、理解しようと努力してくれている部分を見るべきだということだ。人は他人と同一人物ではないため、その人の事を全て完璧に理解することは不可能に近い。そのため、他人が他人を理解しているのかが重要ではなく、理解しようとしてくれているのかが、重要なことだと感じた。この作品の中でも、伸行がひとみの為に聴覚障害について調べたり、ひとみに合わせられるところを合わせようとしてくれている場面があった。頑張っても全てを分かることができないひとみの感情を、少しでも分かろうとしている伸行の行動に心が温かくなった。こういった行動をとってくれる人こそが本当に自分を助けてくれる人だと思う。

この作品から私は、聴覚障害について知らなかったことを知ることが出来たと思う。それに加えて、もっと深いことを考えるきっかけをくれた。見えていることだけではなく、見えないものにも焦点を当てる必要があるということだ。このことは、私が注目した三点以外のこの作品全体にみられる要点だと思う。光が当たらない場所にこそ本当の価値が隠れているということを知り、大切にしなければいけない。

有川浩『レインツリーの国』新潮社

平成 30 年度図書委員

心理カウンセリング学科	丹 明彦
心理学研究科	浅井 憲一
人間福祉学科 (生涯福祉研究科)	六波羅 詩朗
子ども学科	山中 智省
児童教育学科	小宮山 郁子
社会情報学科	張 元宗
メディア表現学科	小林 頼子
メディア学科	西尾 典洋
地域社会学科 (国際交流研究科)	石井 貫太郎
経営学科 (経営学研究科)	近田 典行
英米語学科 (言語文化研究科)	薬師 京子
中国語学科	胎中 千鶴
韓国語学科	柳 慧政
日本語・日本語教育学科	金澤 裕之
リハビリテーション学研究科	時田 みどり
製菓学科	根本 将博
ビジネス社会学科	神山 直子
新宿図書館長	今野 裕之

2019 年 2 月 28 日発行

編集・発行 目白大学新宿図書館